

## 伊方原子力発電所の廃炉を求める意見陳述書

真宗大谷派見成寺住職 日野詢城

私には15歳ほど年上の伯父がいた。弟のようにかわいがってくれ、一緒に野原で植物採取をしたり、蝶々を追っかけたりしたこともある。空に舞い上がる蝶を楽しげに見ていた伯父は、私が13歳の時、亡くなった。夏休みに2人目の子供が生まれた次の秋のことだった。バイクの練習中に転んで怪我をしたと聞いていた。病院で手当を受けたが怪我の程度は軽いということで翌日は普通に学校に行ったという。2日目の授業中に頭痛が激しくなり病院に行った。検査の結果は「被曝による白血病」だった。その3日後に亡くなった。学徒動員で長崎の工場にいた伯父は、地獄のような街の惨状を見て、山に逃げたという。詳しい話はしたくないようだった。

被曝から13年目の死だった。「原爆医療法」が制定された翌年である。被曝手帳は持っていなかった。2人の子供の父として契約した生命保険は、被曝の申告がなかったという理由で保険金は支払われなかった。

伯父が亡くなった頃、「原子力の平和利用」という言葉が新しい時代を謳歌する様に飛び交った。私はその言葉に抵抗はなかった。チェルノブイリの事故まで「原発」に対して全くと言ってよいほど無関心であったと思う。80年代の初め、ご縁のあったお爺ちゃんに連れられ、初めて原発の現場に行った。その時「子供や孫達の職場が得られると期待して誘致に賛成したが、この土地はわし等でもう終わりだ。誰も住むことができなくなる。」と、ふと洩らした言葉が思い起こされる。

1986年のチェルノブイリの原発事故から2年足らずの1988年2月に四国電力伊方原子力発電所で出力調整実験が実施された。原発そのものの危険性が訴えられ、多くの人が原発について学び始めたそのタイミングで「コストダウンのための出力調整実験」が強行されたのである。2万人を超える人々が全国から集まり、実験の中止を求めた。

1988年の出力調整実験反対運動の中、集会が始まって2時間程経ったとき、代表者による交渉が四国電力の会議室で行われると発表され、会場に多くの人が詰めかけた。議論は真っ向から対立、怒号の中で1時間余りの時間が過ぎ去った。「絶対安全」を繰り返す電力会社の答弁を聞きながら私どもは徒労感を覚え始めていた。その時、1人の女性が悲鳴のような声で安全だと言い張る技術者にむかって叫んだ。  
“あなたは神なのか……！”

会議室は一瞬沈黙に覆われた。電力会社はしばらくして「私は神ではありません。」と答え、「20万分の1の事故率だから安全だ。」と議論の方向を転換した。しかし確率の安全性はあくまで想定で、何の保障もないことがスペースシャトル・チャレンジャーの事故で証明されていた。安全性の議論が空転する中、もはやどんな言葉も説得力を失い、企業側は退席した。

実験は強行された。実験結果は公表されなかった。その後に同じような実験をしたということも聞いていない。「出力調整はできない」という結果だったのだと思う。

2000年9月13日の朝日新聞特集「忘れられないあの言葉」で「あなたは神なのか」という言葉をあげ、その時の気持ちを述べた。

私はその時の光景から一つの共有すべき視座があると感じる。

神なのかと問われると、「神だ。」「絶対者だ。」「間違いなどあるはずがない。」等と答えられるはずがない。「絶対」という概念は人間には成り立たない。必ずどこかに漏れがある。それを佛教では「有漏の知」という。不完全な存在だということを知る知恵だ。その立ち位置を間違えると「魔境に入る」といわれる。絶対者が現れ、それを信じる迷信が始まる。一度そのことを信じてしまうと死をも恐れず殺をも躊躇わなくなるといわれる。科学の分野でも「科学を迷信する」ということが起こっているのだと思う。それが原発だと言えないだろうか？ 「安い原発」「無限大のエネルギー源」「安全な装置」などなど、何れも幻想だと解ってきたはずだ。取り返しのつかない過ちを犯したと思わないのだろうか。その過ちを糾す道は「脱原発」であり「廃炉」であろう。原発関連の多くの研究者や技術者はその道をたずね、道筋

をたてて廃炉の道を辿ることが、今待たれているのだと思う。それが人類の責務だ  
と思う。稼働すれば無限に増殖する放射能の問題を放置することはできない。福島  
の事故処理ができない間は、せめて再稼働をしない。その約束から次のステップへ  
と進む責任があなたの会社にあると述べます。

以 上